
夏の始まる秘密基地

ねりタケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の始まる秘密基地

【Nコード】

N9570H

【作者名】

ねりタケ

【あらすじ】

瀬戸内の小さな港町、夏休みが始まった日、子供達が作った秘密基地に、とんでもない秘密が住み着いてしまう……まっすぐバカな子供達と、ねじくれた馬鹿な大人達の一夏の物語。

第1話「ミカン畑の丘」（前書き）

すこしふしぎな、昭和の匂いが残るのどかなジュブナイル小説です。懐かしいお話が好きな人、子供の頃のノスタルジーに浸りたい人、平成生まれで昭和が既にファンタジーに感じられる都会っ子の皆さんに読んで欲しいです。

第1話「ミカン畑の丘」

真っ赤な麦ワラ帽子が空へ舞い上がった。帽子は潮風にあおられて、ゆらりと斜面を下ってゆく。ミカン畑の隙間を縫うように走る小径を少女が駆け下り、帽子の軌跡を追いかける。

真っ白なワンピースに薄めのカーディガン、長い裾と足下は、走るのに向いた格好とは言い難いが、そんな事は全く感じさせない軽やかな走り。あっという間に帽子に追い付き、年老いたミカンの根本にソフトランディングしたそれを拾い上げ、汚れを払って被り直す。頭上には帽子無しでは眩し過ぎる空。眼下には瀬戸内特有のやや碧がかった海が照り返しできらきらと輝き、足元に視線を戻せばツヤのある濃い緑に包まれたミカン畑と草むらが、海と張り合うように照り映えている。そして、その海と畑の間に窮屈そうな恰好で町が横たわっていた。

「わ、ミカン臭い」

この匂いに包まれるのは久しぶりだ。彼女が知る世界中のどの海よりも命の濃さを感じさせる濃緑色の潮風、夏のミカン畑独特の強い香味、それに油や鉄錆の臭気が混じる空気を胸一杯に味わう。

「けど、落ち着くなあ」

三駒崎市三津町、瀬戸内海に面した小さな漁港を中心とする小さな町である。主な産業は漁業と柑橘類の栽培、ほかにこれと言った収入源はない。昭和の中頃までは、石灰岩を採掘する採掘場もあったりしてそれなりに賑わっていたが、これも閉鎖されて久しい。いまではその跡地が山肌から海に向かって灰褐色の地肌を晒しているだけだ。

時の流れか、木製の手こぎ舟は強化プラスチックの動力船に変わり、町並みもそれなりに綺麗になっていった。だが、人々の生活は今も昔もほとんど変わった様子もなく、少女はこの町のそんなところが愛しくてたまらない。いささか不幸な縁でこの地に流れ着いた

日の辛さを差し引いても、その事実には揺るぎはない。この景色も、潮の匂いも、人も、そして、思い出……

「でも、今度こそ、さよなら」

そう、今度こそ行かなければならない。残された時間はもう長くはない。帽子のつばを握りしめると、思いを振り切るように海に背を向けて丘を下る。

少女の姿が、深緑の畑に沈んでいった。

校門からぞろぞろと子供達が溢れだす。先を争うように駆ける子供達、歩道一杯に横並びの女の子。それをからかいながら逃げる振りをしつつ、付かず離れずな男の子。どこにでもあるありふれた光景だ。

今日で一学期も終わりと見え、皆がほとんど空のランドセル、手には山ほどのプリントや夏休みの宿題、丸めた画用紙や置きっぱなしの絵の具箱と様々な物を抱えている。

「ねえ香奈ちゃん、明日からどうする？」

「うーん、私んち多分お客さんが来るけん、しばらく無理かな」

そんな中、赤いランドセルを並べて歩く3人。左から背の高い順に順子、香奈、由佳、別に決めたわけでもないけれど、なんとなくそういう並びで帰ることになっていた。普段はみんなの家から一番集まりやすい香奈の家も、夏休みはかき入れ時なのでお客さんで埋まってしまう。それに、あまり家にいたら約束以上のお手伝いをさせられるのは目に見えている。

「そか……じゃあ順ちゃんちは？」

ちよつと困ったように由佳が尋ねた、自分の部屋を提案できないことが気になるようで、メガネをかけた顔が少しうつむき気味だ。「いいよ、お母さんも『みんなで宿題やる』って言えば文句なんてないし、カルピスじゃなくてちよつと高い紅茶くらい出すかも、香奈もそれでいい？ 遠いけど。で、時間はどうする？」

質問の返事を待たず、てきぱきと話を進める順子。彼女は二人より頭一つ分背が高い、大きめのポニーテールもよく似合っていて、なんだか一人だけ中学生みたいに見える。それが香奈にはちよつとだけ羨ましい。彼女なら隣の徹子姉さんと並べても、違和感はないさそうだ。

「うーんと、私はお手伝いがなかったらいつでも、宿題って言うたら多分大丈夫」

「じゃあ、お昼からウチでいい？ ご飯食べてから」

「オーケー、駄目だったらゆーちゃんと二人で進めてて」

「ん、分かった。じゃあ私、香奈ちゃんち行く前に電話するね、駄目だったらそのまま順ちゃんちに行ってる」

由佳の家からだと順子の家は一番遠く、途中で香奈の家の前を通る道順になるので、一緒に行くことが決まり事ようになっていた。「いいよー、明日からはクーラーついた部屋で勉強できるねー、順ちゃんちのクーラーよく効くから最高！」

客商売である香奈の家では、よそよりは早くクーラーを導入したのだが、それがたたったか、頑丈なだけが取り柄の旧型は冷房の効きが遅く、巨大な図体と騒音ばかりが目立ってお客さんの居ないときにはほとんど使われていない。

これでやっと、あの灼熱の教室からしばらく遠ざかれる。と、ほっとする。「汗まみれの思い出の日々」なんて子供達にはなんの有り難みもない。ことに、日の当たる窓際の席を引き当ててしまった香奈としては、教室からの解放にこの上ない喜びを感じていた。

友人達と一緒に歩く帰り道も特別な気がして、いつもより話も弾む。なのに、その気分をだいなしにするような声が背後から響いてきた。

「必殺！！ Vの字切りiiiiiiiiつつつ！！」

校門のそばで、走り出してきた少年達が丸めた画用紙を振りかざしながらチャンバラを演じている。打ち合った名刀は、刃こぼれよろしく既に皺くちゃだ。

「アホだねー」

「……だね……」

そんな彼らを冷ややかに一瞥した順子と香奈だが、その中に知った顔を見て、香奈はげんなりとした。いや、声が聞こえたとき既に——「必殺！」のあたり——では分かっていたのだが——「あの暑苦しいバカを、どうか私の視界からいまして——いえ当分の間消してください」思わずそんな事を天に願う。しかし、そんな香奈の願いも空しく、彼らはこちらに向かって近づいているようだ。通路路が一緒なのだから当然と言えば当然だが……正直、あんなバカ達とは関わり合いたくないが、連中の進路と声の勢いからして……間もなく追い付かれてしまうはずだ。

——無視しよう——

そう決め香奈が前を向いて二人と話を再開しようとしたその——まさにその時だった。

アニメの必殺技らしきものの名前を叫びながら切り結んでいたうちの一人——よりによつて達郎だ。この不届き千万のゴミが、後ろもよく見ないまま背中から突っ込んできたのだ。どうやら、チャンバラに夢中でこちらを全く見ていなかったのだろう。背中合わせのランドセルどうしがぶつかり、ぼすつと気の抜けるような衝突音をたてて香奈の隣を歩いていた由佳を突き飛ばす格好になってしまった。

「あ……」

思わず呆然と立ちすくむ男子一同。だが、香奈の対応は違った、自分が被害にあったのなら「いつものこと」と適当に蹴りかゲンコツの一つもかましてやるか——虫の居所が悪いときなら達郎の姉に言いつけてしまうところだ。順子にしても自分でやり返すだろうけれど、突き飛ばされたのは由佳だ。これは許せない、何より由佳が彼らに何か悪さをしたことなんて無いし、これから無いと言い切れる。だから、代わりに自分が怒らなくちゃいけない。

自分たちのしてしまった事に動揺してオタついている達郎を睨み

つける。

「謝ったら？」

達郎に向き直ると、怒りを滲ませた声で重ねた。

「謝りや」

達郎は泣きそうな、困ったような表情を浮かべている。悪気はないのだろう、でも、許せないことはある。

「いいよ、香奈ちゃん。大丈夫だから」

順子に手を引っ張ってもらいながら立ち上がった由佳がなだめるが、香奈は譲らない。

気押されたのか、他の男子も遠巻きに見ているだけだ。

「由佳ちゃん、こういう時はちゃんと怒んなきゃ、怪我はない？」

順子も、香奈と同じ気持ちのようだ。由佳のスカートの汚れを落としてながら言う。

「大丈夫、メガネも割れてないし怪我也……ね、いこう香奈ちゃん」

今度は由佳が泣きそうな顔になってしまった。達郎もまだ泣きそうな顔のまま「お……俺……」——そんなんじゃない、さつと「ごめん」って言えばいいのよ——そんな香奈の苛立ちを逆撫でるように、男子達の一人が逆ギレにも等しい暴言を吐いた。

「うるせっ！ 悪かったけどそんな言わんでもええが！ はいすみませんでしたー！」

表情はふざけたように笑っていた。誤魔化すつもり？——それが我慢の限界だった。背負っていたランドセルを抜き手さま、そいつの顔面に叩きつけ、立ちすくんでいる達郎が手に握っていたままの丸めた画用紙を握りつぶす。

「あ……」

順子も、由佳も、達郎も、他の男子も、いつの間にかいたギャラリーも、そして香奈自身も、一瞬何も言えなくなった。——やりすぎた——教科書の詰まったランドセルを叩き付けられた同級生は鼻血を流して半泣きだ。これはちよつとまずい。

もう、こうなりやヤケだ、香奈は深呼吸をして、達郎に詰め寄っ

た。男子の中では小柄な達郎は、頭半分香奈より背が低い。自然、見上げる格好になった彼に、香奈は一気に叩き付ける。

「何すんのよボケ！　ちゃっちゃとあやまらんかいな大体何やってんあんたら一体何年生やねんもう5年生やるまだそんなんしてんのアホみたいああそうかごめんきつとあんたら頭の中は一年やねんなあふん悪かったわ！」

香奈はそれだけを一息にまくしたて、男子達を完全に黙らせる。

その勢いで、どん、とちよつと強めに達郎の胸を突き倒した。ぺたんと座り込んだ彼と、鼻血を押さえている同級生、その他有象無象をじろりと見渡してから、何も言い返せずにいる達郎から取り上げた画用紙を広げて五秒ほど無言で見つめる。

「下っ手くそ……『大きい組』の時描いてたウルトラマンと変わらん……まあ仕方ないかなぁ」

この辺が潮時だろう。

「もうええわよ、これでチャラにしたげる。いこ、二人とも」

座り込んだままになっていた彼らを置き去りにして、二人のそばに戻る。香奈としてはこれで事を収めたかったのだが——何しろ鼻血以上の喧嘩はまだ五年生には御法度、そろそろ親や先生の出張りかねないレベルになってしまった。しかし、香奈にしても少しやりすぎた。言われるままになっていた達郎が真つ赤になって肩に背負い直したランドセルを掴んできた、譲れない物が、男子にはあるのだ。そのちっぽけなプライドを踏みにじってしまったことを、ちょっとだけ香奈は悔い——

「なんでえガサツ女！　てめえチンポ生えてんじゃねえか？　バーカ——！」

——悔いていたが、コンマ2秒で取り消した。こんなヤツに情けをかけようと思った自分が腹立たしい。

「……変態」

「そつよ変態！」

「チカン！」

「えっと、うん。あんましそういうのは」

周囲の女子達も一緒になって騒ぐ。もうゴキブリ並の扱いだ。達郎の友達も援軍を出す、多勢に無勢、もとより数の段階以前の問題であった。

「死んじまえ！ ドブス！」

「おまえらなんか構ってらんねーんだよばーか」

「デカ順、バカ香奈あっちいけー！」

語彙の薄さと幼稚さを丸出しにしたような捨てぜりふを残して、達郎たちは遁走した。

なんとまあ……いくらなんでももう少し大人になってもいいのではないか？ と思うが、あの生き物は集団になると幼児性が増すのだろう。それにもう、香奈としても一刻も早くこの場から逃げ出した。達郎達は反対の方向から脇道に入っていた、放課後会で禁止になった裏近道だ、どうでもいいけれど。

「行こう」

「行こ、でさあゆーちゃん、宿題全部一週間でいけるかな？」

「え？ ええと……自由研究と日記は無理だけど、ドリルとかはやれると思う」

それを見送る事もなく完全に無視、むしろ無かったこととして、彼女達はまた元のように自分達のおしゃべりに戻った。こういう時、察しの良い順子の気遣いは助かる。宿題の話も終わり、今度は2組のだれそれが恰好いいだの、あの子はなんとか君が好きだとか、他愛もない話が続く。そうこうしているうちに話は彼女達自身の憧れの男子の話になっていた。

「ねえ、香奈ちゃんと達郎くん仲いいよね」

そんなとき、ちよつと後ろを歩いていた由佳が急に話題を変えてきた。どこことなく、切羽詰まっているように見えるのは、気のせいだろうか。

「はあ？ さっきのどこをどう見てたらそうなるのよ、ゆーちゃん」
「そうよ、ゆーちゃんってどこかずれてるねー」

順子が腕を絡ませながら言う。それでも「ゆーちゃん」はなおも言いつのる。

「そっ……そうかな、でも香奈ちゃんと達郎くんって幼なじみでしよう」

由佳は不満そうにつぶやいた。突き詰めたいが、食い下がり切れない、そんな感じが見て取れる。

「まあ、幼稚園上がる前からだけど……ていうか……ただ隣ってだけなのに……私は6年の田中先輩みたいな人がええねん。背も高いし頭も良いしね」

だいたい冷静に考えれば、うちの学校の連中は大半が幼なじみではなかったつけ。かつて9組まであったという学校も、今は2組までしかないし、私立なんてどこの東京の話だろう？ というのがここの小学生——そして親達の認識だ。香奈にしても同様である。「えー！ 香奈ずるい！ 田中先輩は私もいいなーって思ってたんだよー。そうそう、知ってる？ 田中先輩って、県外の私立中学受けるんだってー……ショックだなあ」

「ずるいつて……二人とも口きいたこともないんでしょ」

「……いいのー！」

「う、うん」

二人の迫力に押されて黙り込む由佳。くすくすと笑い合う香奈と順子。——良かった、さっきの事は引きずってなさそう——アイコンタクト。

「じゃああたしはこっちだから、またね」

「うん、順ちゃん、ほな」

「ばいばい」

順子と別れ、香奈は由佳と二人だけで道を歩く。もう一人いる事もあるのだけれど、その子は今日はおたふく風邪で学校を休んでいる。一番近所の香奈が彼女の分を含めて二人分のプリントや荷物を抱えている。重たくはないが、かさばってしょうがない。

「かして」

由佳が返事を待たずに香奈の手から荷物を手に取った。

「ありがと、ゆーちゃん」

「いいよ、このくらい。あのね、香奈ちゃん」

ほんの少し、歩みをゆっくりと変えて由佳が尋ねる。

「何？」

「ん、やつぱりいい」

「何い、言いかけたんやから言うたら？ 気になるやん」

言いくいのかそういう性格なのか言いよどむ。なにかぶつぶつ聞こえないような声で悩んでいたが、香奈に向き直ると必死の形相で迫った。さつき、香奈が達郎を詰問したときよりも顔が近い。

「あつ、あのね、香奈ちゃん」

なにをつぶやいているのか気になって顔を寄せる香奈は不測の大声に、後ずさる。

「な、何」

普段がおとなしい由佳の突然の行動に、ついていけない。目の前10センチの由佳が、そのままふと横を向く、真っ赤に染まった頬が目の前にある。

「あのね、達郎くんとは本当になんでもないの？」

絞り出すように言葉を続ける。聞きたいけど聞きたくない——そんな様子がありありと見て取れる。事態の咀嚼に苦慮するまま、あまい相づちを返すのが精一杯だ。

「はあ」

一体全体小学生のなにがどうなるというのか——ただ、この時点でさすがの香奈にも何となく由佳の言わんとすることは察しがついた。「ああ……さつきの話はそうなのか……」と、ただ、その事実を具体的に理解するのにはまだ少々時間を要した。その時点でもう、香奈にとって達郎が「問題外」なのは確定済みだ。

「えーと、これ、いる？」

その潔白の証明代わりに、さつき達郎から巻き上げた彼の絵を差し出してみる。こんな落書きでも、くしゃくしゃでも——由佳にし

てみればそれなりに価値ある物に感じられるかも知れない。達郎の部屋でガラクタと一緒に机の引き出し3段目で今年の地層となるより、絵にしてもずつと本望だろう。

「ごつ、ごめん！ 今の忘れて。ま、またね」

突然だった。差し出された絵と香奈の顔を交互に見つめていた由佳が、さらに真っ赤になったかと思うと、絵を差し出した姿勢のままの香奈を置き去りにして、逃げるように走って行ってしまった。取り残されてしまった香奈が冷静になった時には、由佳の姿は見えなくなってしまうていた。

「忘れてって……無理。でも意外だなあ、ゆーちゃんがねえ……ていうか……アレのどこがいいのか……」

そういえば、さつき田中先輩の話題にもちつとも食いつかなかつたなあ……とぼんやり歩いているうちに、気が付くと高台のミカン畑の中の道路にまで来ていた。見下ろすと、森の切れ目、木々の隙間から漁港と町が一望出来る。少し向こうには小さな島々が連なり、無機質なコンクリートの建造物とアンテナがそれぞれの島の中心部にある。見立てによつては船に見えなくもない島が、対岸まで点々と並ぶ。香奈の好きな場所のひとつだった。それを思い出して少し首を捻って海を眺める。そうするとなんだかとてもすてきな夕焼けが見えるのだ。今はまだ太陽は厭になるくらい熱く頭上にあつたし、水平線の上にのっかっているのはわた菓子のような入道雲だったが、これはこれで夏らしくていいように思える。

確か、最初にこの景色を教えてくれたのは、達郎だった。まだ、男子だ女子だと区別のなかった、平和で、柔らかな時だったと思う。達郎がウルトラマンに夢中で、何故かゴジラにされたお父さんを倒していた頃だ。初めて彼女をここに連れて来たとき、やはり雲が出ていて、それが何だか何かに似ているといつて、無理矢理彼女を引っ張ってきたはずだ。ただ、そのときにはもう雲の形は変わってしまったていて、そのせいか、何だか今でもそれが何に似ていたのか思ひ出せない。

でも、そのときも少し首を傾けて見たと思う。そうしないとそれが見えないと言って達郎はうるさかった。

「うーん、なに考えてるんやろ、私」

一学期の図工で香奈はここからの景色を描いた、やはり少し傾けて。そのときの絵には入道雲はなかったし、みかんの葉もまだようやく揃い始めた頃だった。幸いにして、図工の先生は「絵が傾いているよ」などと野暮な事を指摘することもなく、思うままに描き上げる事が出来た。それで病気で休んだ友達の絵や荷物を半分、由佳に預けたままだったことを思い出す。彼女の事だから、ひよつとすると気をきかせて届けてくれたかもしれないが、どちらにせよ荷物の半分は自分が持ったままだし、何より『誤解』を説いておく必要は感じた。少し気まずくはあったが由佳の家に寄ることにする。

由佳はすごく良い子だし、親友だし、真面目だし、口は固い。間違っても変な噂をばらまいたりはいしないはずだ。だけど——ほんのちよつとだけれど——由佳には思いこみが激しいところがある。お互いの平穩のためにも、きちんと説明しておくに越したことはないだろう。

「ここからだと畑を上った方が近いかな？」

この丘ならそんなに傾斜もきつくはないし、回り道をする事を思えば軽いものだ、とにかく体を動かせば、何もかも面倒なことは忘れられそうに思えた。香奈は荷物をしっかりと抱え直し、気合を入れて一気に斜面を駆け登った。

第1話「ミカン畑の丘」(後書き)

第2話「海賊カラコギ丸」

第2話「海賊カラコギ丸より、給与は歩合制です」(前書き)

くだらない事でケンカになってしまった達郎と香奈、それぞれの帰り道……達郎は、ミカン畑の丘で不思議な少女と出会う。

第2話「海賊カラコギ丸より、給与は歩合制です」

「こんにちは」

夏の空に挨拶された。ちょうど丘のてっぺんで一番急な坂の最後、上がりやすいように石組みの階段が作られているところで。

——女の人だ——

ちょうど見上げる形の達郎からは白い服が雲に融けていて、彼女がいたことに気づかなかった。青い空を背に、雲の色のワンピースと空の色のカーディガン。夏の空を着て佇む彼女の肌は不思議なほどに白く透き通っていた。鮮やかに赤い麦わら帽子はまるで太陽のよう。

達郎は彼女に見とれてしまって、返事ができなかった。

「地元の子よね？」

笑いかけてくる彼女から目が離せなくなる。

「こんにちは」

「ど、どうも」

地元の人ではないのか、言葉に訛りが無い。いや、あえて「地元の子」などと聞いてくるのだからよその人だろう。薄い黄色のリボンを纏った真つ赤な麦わら帽子の下からのぞく彼女の顔はまるでお人形の様で、これまで達郎の見てきたどんな女子よりも奇麗だった。「この辺りにお寺があったと思ったんだけど」

「お寺って、カッパ寺のこと？」

「カッパ寺？」

「ああ、すみません、鬼山寺のことでしょう、僕らはカッパ寺って呼んでるんです」

少し困ったような顔になる彼女。達郎が慌てて言い直した。なんだかうまく話すことが出来ず、つられて達郎も標準語になる。胸の動悸は坂道を駆け上がったせいだと思いたい。

「ふうん……そうなんだ。この辺りは久し振りなの……ずいぶん変

わったのね」

——久し振り?——

「お寺は……戦争中に焼けちゃってお墓だけが残っちゃって」

「この辺も?」

港はあるが別に軍港だったわけでもないし、狙われるような都会にも見えないが「呉帰りの迷子のB29が八つ当たりして落としていった」と達郎は聞いている。サキヤマのじいちゃんのミカン畑裏手の崖も、もとは海まで歩いて降りられたところが爆弾でえぐれて消し飛んだという。呉なんてずいぶん遠くだと達郎は思うが、飛行機にしてみれば近所も同然なのだろう。

「うん、少しだけど……町で亡くなった方はいなかったそうです。住職さんも防空壕に入ってた無事だったって、建て直すのが面倒だとかなんとかで、お寺の仕事は住んでる家でやってるみたい」

「そうなんだ」

年の頃は自分の姉と同じくらいに思えるが、元気だけがとりえの姉と比べると、何だか今にも壊れそうな硝子細工のようで、それでいて素朴な手作りの器のような温もりも持ち合わせ——目も眩むような美人なのに、親しみも感じた。

「ええと、だからあのお墓の向こうの草むらが、お寺のあった所なんです。今は小さなお地蔵さんが並んでて、そのうちの一つがカッパに似てるって、それで、そう呼んでるんです。だから……今は誰もいないはずですよ」

「そう、それでご住職は今どちらに?」

微かに浮かぶ困惑の表情も、彼女の美しさをいつそう際立たせる。

「うんと、そこまではちょっと」

「そう、ごめんなさいね、手間かけちゃって」

「いや、そんなちつとも」

立前でもなんでもなく心からそう思った。そう思わせるだけのものが彼女にはあった。大人ならそれを「美人だから」の一言で片付けたかもしれない。

「じゃあ……そうだ、またね」

達郎は、自分が何も考えられなくなっていることも分らないまま、彼女の背中が小さくなるのを見送る。我に返って用事を思い出した時にはもう、彼女はいなかった。それはまるで振り向くたびに姿を変える、夏の雲のようだった。

「痛あ……」

気が付くと香奈はみかん畑の中でひっくりかえっていた。今はもう誰も手を入れることのないミカン畑は、雑草が伸び放題だった。そのせいで、錆びて折れたスプリングラーのパイプに足をかけられてしまったのだ。

「ドジった……」

ぼやく香奈。顔に影をなげかける枝にツヤツヤと光るゴマダラカミキリが一匹、彼女を笑っているようにとまっていた。彼女の倒れこんだ草むらから、押し潰された青草の香りがふうと立ちのぼり、まとわりつく。打ち付けた節々が少し痛むが、たいした怪我はしていないと分かる。

それでもなんだか、草の中に寝ていると涼しくて、転んだことも、無礼なカミキリムシもみんな許せる気分だった。空の底から見下ろす空の深さ、水色の空と入道雲。理屈じゃなくて、綺麗。このままずっとこうしていたかったけれど、そういう訳にもいかず、名残惜しそうに体を起こした。

「今日は見逃してあげる」

体中に着いた汚れを払いながら、香奈はカミキリムシに笑い返した。彼の首には農協から五十円の賞金が懸けられていたが、男の子達のようにそれを小遣い稼ぎにするほど困っているわけでもなければ、首狩りのような野蛮な行為が好きなわけでもなかった。

「達郎も嫌いだった、虫狩り」

ロクデナシでバカで下品なヤツだけど、食べない生き物と自分か

ら噛みついてこない生き物を殺すことだけはしないのが達郎だ。そのくらいには、アレのことを認めてやっても良いと思う。

転んだ勢いで撒き散らしてしまった荷物を拾い集めて汚れを払い、忘れ物はないかともう一度あたりを見回した時、彼女の視界の端に何か見慣れない建物が映った。

古ぼけたその建物は、ちょうど香奈の登って来た方と反対側にあった。通りから外れて、丘のふもとに佇むそれは、そのからだをなかば崖にめり込ませていて、何とも奇妙に映った。

「あんなところに、何だろ」

どうやら何かの店らしく看板らしいものがみえた。ぼろぼろの屋根は、所々瓦の色が違っていている。遠くてよく見えないが、別に気にするほどのこともない。実際歩き出したときには、その屋根のことは香奈の頭からどこかへ飛んで行ってしまっていた。

「じつちゃん、いる？」

息を切らせながら、達郎が駆け込んで来た。ドアは、開いたままだ。汚れてガラスでなくなったガラスに、「新製品入荷！」と書かれたビラが内側から貼られている。いつの新製品かも判らぬほどに黄ばんではいるが、かろうじてここが何かの店であったことを語っていた。

「おるよ」

奥から、店の主人らしき老人が、麦茶を両手に持って出て来た。

「まあ、飲めや」

達郎は麦茶をひったくるように奪うと一息に飲み干した。老人は、そんな達郎の様子を嬉しそうに見ていた。

「おかわり、いるかい？」

おそらくは、自分のためであつたらうコップを、老人は手渡した。すりガラスの花柄模様が、水滴に透き通ってゆく。達郎はひとこと、ありがとう。と答えて、二杯目の麦茶を飲んだ。

麦茶を飲んでいて達郎が一心地ついたとき、一風変わった張り紙があるのに気が付いた。新入りらしいその張り紙は、黄ばんだ先輩たちの上で、申し訳なさそうに隅っこにいた。そして、それにはこう書かれていた。

「男女アルバイト急募！職種：海賊業 年令：十八〜八十才前後
健康に問題のない方、リストラで解雇された方、定年後の再就職先をお探しの方（もちろん経験者優遇） 時間：相談に応じます 勤務地：海上／海岸／海中 時給：やまわけ、一回の襲撃あたり最低百二十円より保証。基本的に歩合給です 休日：仕事のない日・暴風警報の出た日」やりがいのある仕事です。あなたも青い海の上で汗を流してみませんか？ 楽しい仲間たちが待っています！ 勿論、初心者にも懇切丁寧に指導致します。制服各サイズ支給、私服もOK！」 応募：三駒電鉄市内電車 津島港駅内伝言板にて連絡されまし。

コードネーム『フック』より」

達郎はそのままの姿勢で、きっかり30秒間凍り付いた。その張り紙に食いつくほどには子供でもなく、それを冗談として受け流すほどに大人でもない。

「掲示板ってまだあるんだ……」

そんなどうでもいい箇所につつまむ事しかできないくらい、驚いた。

「なあ……崎山のじつちゃん。これ何？」

「ん？ ああ……それな、漁協の取り締まり船の募集だわ」
こともなげに答える。

「海賊って書いてるけど」

「書いた奴の冗談だよ。要はボランティアさ、最近アワビやらナマコの密漁が多いらしくって、その取り締まりさな」

聞いてみれば何のことはない、拍子抜けだ。

「アワビは分かるけど、ナマコ？」

アワビやサザエが高い事は知っている

達郎だが、ナマコなんて海で悪友達に投げつける程度のものではない。時々、うまくいくとウネウネベトベトしたワタを吐き出すのがまた強力な手投げ弾という認識だ。それこそ浜の浅瀬で千切れ藻をかきわければ、いくらでも拾える。

「何でも、干して中国に持っていけば高級食材なんだと。日本でもコノワタにすりゃちよつとしたもんだ」

「うへえ……なら、俺も干物作ったらもうけられるかな？」

「かもな、でもそこらで売ってもたいした金にならんぞ」

それはそうだろう、もしナマコの干物をちよつと作って大儲けできくらいなら、香奈んトコの親父さんが漁師をやめて遊漁船付きの船宿などを始めなければならなかった理由もない。

「あ、いけね。じいちゃん、今何時？」

「もうすぐ1時になるぞ。昼飯は家で食うんだろ、早く帰らないとお母さんに怒られるぞ」

「それもあるけど……早く行かなきゃ、今日から組み立てなんだ」

「ほう！　じゃあ……いよいよなんじゃな？」

崎山のじいちゃんが、ニヤニヤと年甲斐もない笑みを浮かべる。

「計画」の事は大人達には秘密だけれど、崎山のじいちゃんは特別だ。何より、じいちゃんの協力なしには「計画」は絶対にここまで進まず、子ども時代によくありがちな想像力だけが暴走して実行力の追い付かない、どこにでもあるガラクタの一つになっていたに違いない。

それはそれで素敵な思い出の一つになったかもしれないけれど、せっかくならば叶えてみたいと思う。秘密基地と秘密兵器は、絶対に切り離せないものだ。

「またね！」

「ただいまー」

ガラガラとうるさい引き戸を開け、冷蔵庫のある台所へ直行する。ヤカンに入ったまま冷やされている麦茶をコップに注いで飲みほすと、ようやく帰ってきたなあという感じがする。さっき、おじいの店で飲んだ水分はこの暑さでとくに消費してしまった。

「誰ー、達郎？ もうお昼みんな食べちゃったよ」

姉の幸恵がシャワーに濡れた髪を拭きながらやってきた。その姿を見て達郎はげんなりする……下はかるうじて穿いているが、上はタオル一枚を頭からかけただけ。つまりは「パンツ一丁」という状況。「部活に邪魔だから」と肩で揃えた短い髪は濡れたまま汗ばんだ頬に張り付いている。

他人のそれならば——まあ子供なりに色々興味が芽生えつつもない年頃らしく、ドギマギしつつもチラ見くらいはしてしまうだろう光景だが、身内のそれはどうにも扱いにこまる。

「麦茶、あたしも。氷はいらないー」

普段から達郎のことをパシリ扱いして遠慮など無い幸恵だが、さつき香奈にもコテンパンにやられてしまった達郎としては連敗だけは避けたい。そんな意地で「自分で入れるよ」とぶつきらばうに返事をした。

「はあ、じゃそこどいてよ」

姉の方は弟のプチ反抗期など意に介さず、コップに手を伸ばす。

達郎の方は、目を逸らすのも何だか自分の中の不純さを認めてしまいう気がして、あくまで「俺は呆れてるんだ」というアピールを込め、言葉を返す。プチでも反抗期は継続中だ。

「姉ちゃん……そのカッコってどうよ、おとんに怒られるぞ」

「はあ？ 生意気に色気づいてるんじゃないよ、子供が」

こちららも、身内らしく容赦がない。

「そんなんだから彼氏がいねーんだよ」

「るっさいなボケ、いらねーよ。アタシは今ソフトがあればいいんだ」

「じゃあ沙織さんに愚痴るなよ……昨日も電話で『男欲しい』って喚いてたじゃん」

「盗み聞き？ 趣味悪うー！」

「……ウチであれだけ大声で騒げば嫌でも聞えるわ」

木増築30年の2階建て、すきま風こそ吹き込まないが、外側に面していない壁はぺらっぺら。そもそも部屋と部屋の仕切の半分は襖の純和風家で、由緒正しく階段下の廊下に置かれた電話にプラグイバシーを求めるのは酷という物だ。

「……携帯、欲しいね」

「……それだけは同感」

姉弟で言い争いに落としどころを見つけ——まあそもそも喧嘩と云うほどでもない日常のやりとりだが——せめて中古のワイヤレスフォンを買ってもらおうと共闘する事に決める。相手は、何事にも「どーでもいい」としか考えていないフシのある（姉の素行と門限は例外）父ではなく、我が家の財布を握る母、折絵だ。

「ていうか何アンタ？ なんで沙織は『さん』付けなのよ？ あたし、一応あんたの姉なんだけど」

「え？ え……だってお客さんだし」

思わぬ所をつかれ、動揺する達郎。そのアタフタした様子に気付いた幸恵がめざとく攻める。

「へえ……まあ、年上に憧れるお年頃なのかもね……しょうがないかな。沙織可愛いし。でもね？ それは風邪みたいなものなんだよー」

ニヤニヤと、あからさまに馬鹿にしたような笑みを浮かべて達郎の頭を掴み、短く刈られた髪をくしゃくしゃとかき混ぜる。

これはまずい、確かに沙織さんは綺麗だしおしとやかで——けれど、そういう想いで見ているわけでは——しかし余計なことを言ったら姉の思っ壺、下唇を噛んで屈辱に耐える。

「ん？ ちよっと伸びた」

頭をかき混ぜていた姉の手が止まった。

「何が？」

「背、ひよつとしたらだけど。香奈ちゃんより高くなるといいね」
「ほっとけ」

頭を押さえつける姉の手を振り払い、テーブルの上の蠅帳を畳んで冷めたチャーハンをレンジに入れる。

「母さんは？」

「ん、もうパート行つたよ。ラッキーだったね、通知表」

イヒヒ、と意地悪な笑みを浮かべる姉だが、どうせ雷の落ちるのが遅いか早いかの違いだ。幸恵にしたってそんなに成績が良い訳ではなく、犠牲者が増えるのが嬉しいのだろう。目がそう言っている。

「あっち行けよ」

「はいはい」

低い音を立ててチャーハンを温めていたレンジが、チン、と鳴った。

——これを食べたなら、いよいよミSSIONスタート——

逸る気持ちをチャーハンと一緒に麦茶で喉に流し込み、着替えもせずに外へ駆けだしていった。

「それにしても……暑いなあ……」

由佳の家を出た香奈は、自分の家と逆に向かって海沿いの道を歩く、ちよつと寄りたいところがあったのだ。結局、由佳の誤解が解けたかどうか怪しいが、まあ追い追い解きほぐしていけばいいだろう。

「もしそうでも、友達だから！」

「……いや……私の話ちゃんと聞いてた？ ゆーちゃん……あのね

……」

（だいたいこんなパターンの会話が、十数回繰り返された）

由佳の部屋での話を思い出し、自然と苦笑いがこぼれる。色んな意味で失礼だが、それを由佳にも伝えられず……仮にも親友の思い人だけに、いくらその気がないと言っても達郎のことを悪し様には言いつらい。それがかえって誤解を深めてしまったような気もする。「いつそ達郎、けしかけてみよか」

1人つぶやいて、その考えを自分で却下する。それはいくらなんでも、親友にも幼なじみにも失礼というものだ。断じて自分のためではなく。

5分ほど歩いたところで、ようやく道ばたに日陰が続くところまで辿り着いた。右手に見える砂浜と道路の間に、松と雑木の混成部隊で作られた砂防林が続いている。甲高いニイニイゼミの声が騒々しいが、騒音としか言いようのないクマに比べればいくぶんマシだ。国道とはいえ、山の方に高速が開通してからめつきり交通量の減った道にはセミの声と波の音だけが響いていた。この辺りまで来ると漁港の生臭い潮の匂いが消えて、からっとした塩気だけが薫り、木陰の涼しい風が汗ばんで火照った肌に心地よい。

「なんかいつそう田舎になった気がするなあ」

陸路は、今香奈が歩いているこの国道と併走するJRだけが生命線であり、山崩れなどがあれば、そろって不通となる。新幹線はリニアモーターや飛行機と同じくらいに無縁。あとはこの先にある小型フェリーが市外への交通手段だ。このへんが陸続きなのにまるで孤島のようなと揶揄される所以でもある。そのフェリー乗り場が遠くに見えてきた。このまま歩いてあと十数分……

——用を済ませて、さっさと帰ろう！——

思い切りよく前傾姿勢に構え、木陰の歩道を蹴った。せつかく引いた汗がまた噴き出してくるのも構わず、また全力で。

結局、香奈が家に着いたのはもうだいぶ遅く、初夏とあってまだ日は高かったが、5時をとうに回っていた。お目当ての品が無くて悩んでしまったのが悔やまれる。結局、何も買わずに帰ってきてし

まった。

「まあいつか」

船宿の民宿兼自宅の裏手へ回ろうとしたとき、ふと見慣れないものが庭先に止まっているのに気がついた。

——バイクだ——

母親たちがよく乗っているスクーターとも、おじさんたちが乗っているスーパーカブともはつきりと違う大柄な車体。カブと同じようにむき出しのエンジンや黒光りするシートは、なんだか生き物のように艶めかしかった。メカには全く興味のない香奈だったが、その姿には目を奪われた。だが、それは本当にほんの少力で、バイクそのものよりも「誰がこんなものに乗ってきたのか」という方に興味がわいた。普通に考えれば泊まり客のものなのだろうが、釣り客であればたいてい自動車、それもどちらかというと積載量重視の大柄なものが多く、そうではないだろう。とすれば観光客かとも思ったが、この町にさしてみるべき名物もないことは、十年あまりを過ごしてきた香奈には自明のことだ。次点で、時々迷い込む日本一周真つ最中かつ自分探しの若者。こちらはいかにもあり得る。さすらい人にはバイクは似合いそうだ。

それでも珍しい。これから夏休みに入るから客足も普段に比べれば増えるだろうが、家族旅行の客などほとんどこない松野家の「ふな屋」にしてみればそれほどの期待はない。手伝いついでに顔でも見に行つてこよう——そう決めて台所へ向かう。この時間で、お客がいるとなれば母親はきつと夕餉の支度をしているはずだ。自分から進んで手伝うと言いつせば、少しは怪しまれるかもしれないが、断りはしないはず。いつもなら軒下で暑さに参っているハヤテ——松野家の愛犬で、香奈が拾ってきた——をひとしきりてがってから家に入るのだが、今日は軽くあごを撫でるだけでいそいそと裏へ回る。「涼しくなつたらお散歩行こうねー」

寂しそうな眼にちよつと罪悪感を感じて、心の中で手を合わせる。裏の勝手口から調理場を兼ねた台所へ入ると、予想通り母が包丁を

握り、まな板の上のハツカクを下ろしていた。

「お客さん？」

「なあに、ただいまも言わないで。そうよ、一人だけ飛び込み。ちようど部屋は空いてたし、しばらくいらっしやるみたいだから、ありがたいけど」

「ごめん、ただいま。表のバイクってお客さんの？」

「黒い単車？　そうよ。ほら、アンタも手伝つて。なんか汚れてない？　着替えたらお風呂洗ってきて。その頃には料理もできるから、ビールと一緒に持つて行つてね」

「はい」

小細工の必要もなく、お客の顔は拝めそうだ。高学年になった頃から、時には香奈が配膳をすることもあり、特に繁忙期など釣り客の団体に香奈がビールを持つて行つて酌などすると、どんなにかつい一団も相好を崩し、嬉しそうに飲んでくれる。そんな時の彼らの幸せそうな顔が香奈は好きだった。常連客の中には、香奈のことを孫のように可愛がり、来る度にお土産を持つてきてくれたり、お小遣いを渡そうとする者もいた（これはさすがに母に断るよう言われたが）。大漁の時などは、獲物を分けてくれたりする人も多い。

父はあまりいい顔をしないのだが、客受けもよく、弁えて決して羽目を外さない常連達の手前もあつて何も言わないようだ。香奈にしても、その空気を察してあまり長居をしないようにして、一、二杯注いだらすぐ引き上げるようにも心がけている。それを見た母は「あんたは将来絶対悪女になるねえ」

などと、およそ小学生の娘にむけるとは思えない感想をもらし、隣で食器を洗っていた父親を硬直させた。最も、香奈の酌で一番機嫌が良くなるのは、誰あろうその父なのだが。

「こんにちは」

部屋に帰りランドセルを放り込んで、動きやすいストレッチデニムとＴシャツに着替え、風呂場へ向かう途中で声をかけられた。年の頃は二十歳を回つていそう、大学生くらいの男の人だ。どうやら

彼がバイクの持ち主らしい。

「いらつしゃいませ！ すみません……お風呂ですか？ これから支度しますので、もう1時間くらい……」

客商売の娘らしく、頭を下げて詫げる。

「ああいや、ちょっと夕涼みにでも出ようかと思ってね、でもまだ外は暑そうだね。東北とは大違いだ」

青年が、違う違うと手を横に振る。

「お客さん、東北の方ですか？」

「ん、いいや。先週まで北海道に居てね、こっちまで下ってきたんだ」

「日本一周とか……？」

この時期には、そういう大学生や若者がやってくる事も少なからずある。移動手段はバイクに限らず自転車だったり徒歩だったり……色々だ。

「いや、そこまでじゃないんだけど。たまたまね。……ミッシーって知ってる？」

「……っ！」

知っているも何も。

「ええと……」

「あはは、ごめん。まあよくあるヨタ話だろうけど、ちょっと面白くなって……ちようどこの辺で一泊しようと思ってたからさ」

まあ、普通の感想だろう。今時、未確認生物の存在なんて信じているのは余程の子供か、それとも――

「ミッシーに会いたいですか？」

「え、いやそりゃ見られるモンなら」

ミッシーというのはこの町の湾内にいるという正体不明の怪物だ。よくある噂話の一つと言ってしまえばそれまでのだが、香奈にはそれを『ホラ話』で片付けたくない理由がある。てっきり笑われると思っていた青年は、困ったように首の後ろをかいていた。

その仕草が子供っぽくて、年上なのに、ちよつとからかってみた

くなる。

「もしよかったら、晩ご飯の後でご案内しましょうか？」

「ええ？」

目をまん丸にして驚く反応は期待以上だ。大人びているとはいえまだまだ小学生、達郎ほどではないけれど、香奈だつてイタズラ——ことに大人を驚かせるようなものは——決して嫌いではない。

「そうですね……今日だと7時過ぎ、まだ明るい時間だと思いますから、散歩ついでにご案内しますよ」

満面の営業スマイルでそう言った。

青年はお酒を飲まなかった。お膳を運んできた香奈が「ビールはどうします？」と尋ねると、「ああ、ウーロン茶があったらそれが欲しいな」

と答え、ウーロン茶を持ってきた香奈に、

「ミッシーに会つのに酔っぱらっていたくないからね」

と、おどけて見せた。今日の客は彼だけらしく、風呂掃除の他に香奈が他に手伝う仕事はなさそうだ。

商売としては残念だが、支度をする時間が出来たのは助かる。夕暮れと満潮が重なる日はなるべく挑戦しておきたい。こつそり、自分の部屋から道具一式を大きめのポーチに詰め、玄関でハヤテの散歩道具——スコップとゴミ袋、それに懐中電灯と防犯ブザーを揃える。

「ハヤテの散歩行ってくるー」

台所の母に向かって叫ぶ。そうしないと流しで洗い物をしている母には聞こえないはずだ。青年には7時15分きっかりに玄関の外で待っているよう伝えてある。あとは「得物」だけだ。ハヤテの散歩綱をつかんで外に出てすぐ、隣の家ドアを叩いて達郎を呼び出した。

学校の机の中や、普段の生活態度からは思いもよらないくらいに整頓された部屋、それが達郎の部屋だ。物こそ多いが、雑然とはしていないし、小学生男子の部屋としては標準以上に片付いていると思う。

達郎の部屋にいる間、ハヤテは外でじつとまっている。本当は今にも催促して跳ね回りたいのだろうが、行儀良く仕付けられてしまった彼は、忠犬よろしく窓の下だ。

「……出来てるから、針は着けといた」

仏頂面としか言いようのない表情で達郎が指した先には確かに、頼んだ「得物」が置かれていた。しかし、こつちが水に流してやろうと頭まで下げているというのに、この態度はないのではないか？ 今日一日どれだけ自分が苦労したと——喉まで出かかった言葉をぐつと堪える。だいたい部屋がシンナー臭いつて！ …… ……

——……どうどう自分……——

それは由佳自身が言わなければならない事だ。達郎がどう応えるかは、その時見届けられればいい。

「何だよ……駄目か？」

「ああ、違う違う。へえ……やっぱ上手いモンね」

一見しただけで、その作りの丁寧さが分かる仕事には香奈も感心せざるを得ない。売り物のルアー以上の塗装。それも、針が装着される根本の金具のフチまでしっかり手を入れている、注文以上の出来映えだ。

「もらったボラ皮で巻いて、目玉は大型の７ミリに変えた。ちよつと重くなったけど、ちゃんと浮く」

「信用してるってば」

手に取ったそれは、頼んだとおりボラ皮を貼り付けられ、元になったアイルマグネットよりも渋くなり、疑似餌というより魚そのものだ。ただ、表面がまだ少し柔らかい。

「あれ？ これまだ乾いてないよ！」

手に塗料が付くことより、ルアーに指紋が付いてしまわないかと

心配になる。慌てる香奈と対照的に達郎は冷静だ。

「ああ、コーティングをシリコンにしてみた。スエがNゲージオ
ラマ用のを分けてくれたんだ。手触りがワームっぽいだろう？ 滑
らかにするの苦労したんで」

「そうなんだ……」

——コイツ絶対学校とキャラ違う——

いかにも凝り性の達郎らしい。三馬鹿の達郎とスエとコダマは模
型仲間でもあるが、こうした細かい仕事をさせたら達郎が一番だろ
う。それに、塗装用のエアブラシを持っているのも達郎だけだ。

「リップも半分に削った、そこんところにはシリコン塗ってないから
ちよつと段差あるけど……気になるなら直す。引いてないから分か
らないけど、前より潜らん」

それは大事、今回の仕事でボラ風の見た目をするのと同じくら
いに念を押した点だ。

「それは大丈夫、引き方次第で浮かせられるから」

どうしよう——ワクワクする、早くこの子を投げてみたくて、た
まらない。

「ああ、それとついでにこれもやる」

ルアーを矯めつ眇めつしている香奈に気分を良くしたのか、よう
やく笑顔になった達郎が、ビー玉より少し小さな貝殻を差し出した。

「何？ ……あ、……綺麗」

どうせ達郎のくれる物なんて……と思ったけれど、それは本当に
綺麗だった。艶のあるピンクとオレンジ、それがソフトクリーム
のような乳白色と混じった、小さいけれどピカピカの貝殻。会心の出
来のルアーには敵わないけれど、とても可愛い貝殻だ。見たことが
ない貝だけど、どこから流れ着いたのかもしれない。

「ええと……んー、さっき浮力テストしてる時、浜で拾った。珍し
いだろ？ やるよ」

「いいの？」

「俺別にいらねーし」

「ふうん……ありがと。でもなんに使うの、これ？　綺麗だけど」
机に飾っておくには、小指の爪ほどのサイズは少し小さい。

「ん……かして」

貰ったばかりの貝殻を達郎の手に戻す。

「確か、幸恵のペンダント直したときの金具があつたから」

そう言つて小さなドリルで穴を開けると、あつという間に金具を取り付け、綺麗なペンダントを作ってしまった。

「ん、オマケ」

そんな短時間で作業したら、貝殻が割れてしまうのではないかと心配したが、そんな心配は全く無用だった。金具を取り付けた穴の外には、傷一つ付いていない。

「えへへー……おまけ……か」

オマケにしては洒落ている。思わぬプレゼントに嬉しくなつて、思つていなかった言葉が口についてこぼれた。

「ねえ」

「何、竿だったら俺の貸すつてば」

達郎は背を向けて卓上の道具を片付けている。照れ臭さを隠しきれない背中がちょっとだけ可愛い。

「ミッシー退治、達郎も来る？」

「うえ？」

——訂正……、やっぱ間抜け顔だ……ゆーちゃん、我が友よ……
心底、あんたの気持ちがかんない……——

第2話「海賊カラコギ丸より、給与は歩合制です」(後書き)

次回 第3話「ミッシーの秘密」

香奈と達郎は、師匠の話を元にミッシーの影を追うが、海賊騒ぎに巻き込まれ……

読んでくださってありがとうございます。頑張っ^て続きますので、どうぞよろしく(ペニっ)

第3話「ミッシーの秘密」(前書き)

第3話です

第3話「ミッシーの秘密」

少女は夕暮れの境内を一人歩いていた。かつて寺の境内だったそこは、所々に人が通った道がある他は草が伸び放題で、無数のヤブ蚊が飛び回っている。寂しげな空気の中をゆく彼女の姿は少々場違いな感じた。

「しかし……まだ水無月やゆうのに、せっかちやねえ」

まだ夏も始まりだというのに、ヒグラシの寂しげな鳴き声が染み渡る。

「ずいぶんとまあ……荒れてること」

言葉通り、その草むら——茂みといった方が近いだろう——崩れかけた土塀に囲まれた中は荒れ放題になっていて、奥の墓地へと続く道を半ば侵しつつあった。

「あ、いた」

似合わぬ格好でヤブこぎをしていた少女が、何かを見つけたらしく立ち止まる。向きを変えて進んだ先に壁際に空いた一角があり、数体の地蔵が並んでいた。

「久しぶりね、元気だった？ ……あら、まだ寝とんな」

そう声をかけ、地蔵の前にかがみ込んで手を合わせた。そして顔を上げ、手を伸ばして愛おしむように地蔵の頬を撫でて微笑みかける。

夕日を受けて、少女のワンピースと頬が朱色に染まった。

「ただいま、帰ってきたよ……」

「じゃあ……ミッシーってのは」

「この海のヌシです、多分」

「多分？」

香奈はミッシーを見てみたいという客の青年——彼は村上と名乗

った——と一緒に、ふな屋からほど近い川の河口にかかる橋のたもとに来ていた。海と繋がる川からは潮の匂いがして、そこが海の領域だと語っている。

「ごめんなさい、私も実は一度しか見た事ないんです……それも影と目だけ。音は聞いたことがあるけど」

「音って、鳴くの？」

「え……そうじゃないけど、エサの魚を食べる時、水面で……なんて言うかなあ『ボフ』って感じの音がするの」

ちょうどその時、水面で何かが跳ねる音が続けて聞こえてきた。

「あ、今みたいなの？」

「あれは……ボラが跳ねた音です。多いんですよ」

満潮の終わりが近いせいか、流れはとてもゆるやかだ。流れも速くないので潮止まりには水面が鏡のように凜ぎ、小魚や虫たちの息づかいが聞こえてくる。

「ボラかあ、それなら知ってる。あんまり美味しくない魚だろう？」

「そうですね……ここらの海は綺麗だから、食べられなくもないけど、やっぱり臭いです。でも、冬に沖で釣れたモノなら美味しいですよ」

「へえ、流石は海の子だね」

「そんなんじゃないですけどね」

当たり前に知っているような事を褒められて面映ゆくなり、誤魔化すように道具の支度を始めた。

結局、達郎はついてこなかった。自分が改造したルアーがどう使われるかは見たかったようだが、香奈の家「ふな屋」のお客が一緒にだと聞いて遠慮したらしく「作りかけのプラモがあるから」と、追いついてしまった。ハヤテは達郎と遊びたがっていたけれど、香奈が散歩用のリードを外して歩き出すと、すぐに嬉々としてついてきた。

「で、ミッシーは釣れそう？」

「うーん、今日は無理みたいですね。条件は悪くないんですけど…

…」

ハヤテの散歩がてら、新しいルアーを試すだけのつもりで来てみたが悪くない雰囲気だ。しかし、ミツシーが現れる条件ではなさそう。おじいの話が確かなら、この様子ではミツシーは出ないだろう。

「そう？　いかにも釣れそうだけどね……ほら、また跳ねた」

再びボラが跳ねる音がした、確かにエサになりそうなボラはいるようだが、何かに追われている様子が見えない。これではスズキも難しい。引き潮になれば流されてくるフナや鮎を狙ってスズキが寄りそうだが、それはだいたい先の時間だ。両親にあまり心配をかけたくないし、門限など設けられてしまつては面倒になる。

「ちようど今くらい……タマヅメに……夕暮れのことなんですけど、潮が引き始めるのは、好条件だから。でも、今日は気配がないです」「すごいなあ、なんだか漁師さんみたいだ」

字面だけなら子供をからかつていそうな言葉だが、そうではないようで「心底驚いた」顔で真剣に香奈の話の聞いている。

「それでも、漁師の娘ですから」

香奈が物心着いた頃には、父は既に漁師をやめてふな屋を始めていたが、今も漁協に籍は置いたままで、時折、客のない日を見計らつては自分で船を出している。「二人」の師匠である祖父にしても入院する直前まで船に乗っていたのだから、血は争えない。

「ミツシーって……デカイの？」

「そうですね……多分1メートルは軽く越えていると思いますよ」

「そんな魚がいるんだ」

「祖父の話だと……昔はもっと大物も居たそうです。」

「あ、ひよつとして『シーバス』ってやつかな、友達がいつも狙つて釣りに行つてた」

「似てますけど、ちよつと違うかな……お客さんは『アカメ』って知ってます？」

「シーバス」は釣師の一部で使われるスズキの俗称で、アカメは時

折テレビなどで『幻の魚』として取り上げられることもある、一般には珍しい魚だ。

「聞いたことあるなあ、すごく珍しいんじゃないかな」

「実際にはそれほどでもないんですけど、このあたりには居ないって言われていますね」

アカメの瀬戸内海での捕獲例は極めて少ない。生息地は高知県と九州の特定河川と言われており、瀬戸内の捕獲例は徳島に近い海域でのものくらいだ。太平洋から遠く離れた三駒崎では、生息していないことになっている。釣り上げたことがあるという香奈の祖父にしても、戦前の話だと言うから、本当に希な事だったのだろう。

「なんか、ロマンだね」

「……うーん、単に大きい魚を釣ってみたいってだけかも。でも、今日は駄目みたいです、帰りましょう」

こんな日に粘っても、時間を浪費するばかりで両親に心配をかけるだけだ。

出しかけの道具を袋に戻し、そばで大人しく座り込んでいるハヤテの手綱を引くと、跳ねるように走り出した。「こら」と制して引き寄せる香奈を、ハヤテが恨めしそうに見上げた。

「そんな顔してもダメー」

ちよつと甘やかし過ぎたかも知れない。

「元気だねえ、何歳？」

「確か……五歳かな」

達郎と一緒にハヤテを拾ったのは小学校に上がる前年のはずだ。人間で言えばもうそれなりに分別のついてよい年代のはずだが、子供っぽい性格と、おそらくは豆柴の血を引いているのである。小柄な体躯のせいで、よく育ち盛りと間違われている。

「人見知りしない子だね」

犬好きと見え、首筋をわしゃわしゃとかき回す青年。ハヤテはうつとりと、されるがままになっている。

「番犬失格ですよ、誰にでも尻尾振っちゃうから」

「可愛くていいじゃん。さて……そろそろ行こうか、あまり遅いところ親が心配されるよ」

ハヤテは「もっとー」とせがむようにしていたが、軽く促しただけでご機嫌に駆け出す。なんとも単純な子だ。

「君は何年生？」

「五年生、でも家では従業員としてこきつかわれてます。こんな風にお客さんの案内もしますよ」

「立派なもんだ、しっかりしているから中学生くらいだと思ってたよ」

——達郎に聞かせてやりたいセリフだ——さすがに幼稚園児ということはないが、アイツなら三年生と間違われても不思議じゃない。

「あはは、いつの間にか……ですね」

並んで歩く青年の背丈は、ちょうど父と同じくらいだろうか、平均的な背丈の香奈からすれば、やはりずっと高い。それでも香奈を子供扱いしない彼には好感を持てた。家の仕事柄、ずっと年上の大人達と接することが多いが対等に近い目線で話してくれる人は少ない。

「いつまでこちらにいらっしゃるんですか？」

「うーん、実は決めてないんだ。とりあえず、次の予定までしばらくあるし」

長期滞在は香奈の家にはありがたいが、なんとも贅沢な話だ。

「じゃあ、その内にミッシーに会えるかも知れませんか」

「そうだな、俺も狙ってみようか……モリなら使ったことあるよ」

「良いと思いますよ、道具はウチに売るほどありますから」

「起きた？」

目が覚めたら尻がすごく痛かった。達郎は寝起きが良い方だが、この日はよりはっきりしと目が覚めた。というか多分叩かれた。涙目で見上げると、姉の幸恵がバットを肩にユニフォーム姿でベッ

ドの上に立っていた。

「あ、さすがに可愛い弟バットで殴ったりせんよ。起こしたげようと思って蹴ったら、あんたがベッドから落ちただけ」

——叩いたのではなくて蹴っただけ——って、達郎が悪いかのような口ぶりだが、罪状も犯人は変わらない気がする。

「何すんだよ！」

落ちていた枕を投げつけたが、あっさりとかわされた。

「気持ちよさそうに寝てるからムカついただけー。こっちは早起きして朝練なのに……」とつとラジオ体操行け」

そうか……今日から夏休みだっけ、と考える間に姉はさつさと部屋を出て行く、相変わらず理不尽な姉だがまあいつもの事だ。時計を見ると6時ちよつと前で、セミがシャワシャワと騒がしい。昨日はこの時間まだ寝ていたから気付かなかったが、外はかなり明るく、本当に夏になったのだなあ実感する。

「……もっぺん寝よ」

からりとした空気と風が、汗ばんだ膝の裏をくすぐって心地よい。しばらくは気持ちよく寝られそうだ。8時くらいになると暑くてとても寝ていられないが、今なら良い感じだ。せつかくの夏休みに、惰眠を貪らずしてなんのための休みか。ちなみに、ラジオ体操の皆勤は昨年寝坊して逃してしまったので、今年はさほど大事にも思わなかった。

「ちゃんと起きろよー、香奈ちゃん待たせたらもっぺん殴るけんね」

もそもそとベッドに戻ろうとしたところに廊下から姉の声が聞こえてくる。ラジオ体操まで起こしに来るかよ……だいたい香奈が起こしに来てたなんて、集団登校を真面目にやってた三年生までの話だ。香奈は真面目だから、低学年の子らをちゃんと連れて行っているようだが、四年生になってからは学校近くでだけ集まって、集団登校っぱく見せるのが今の男子のやり方だった。女子でも個別に登校している方が最近が多い。

「こねーって」

四年生に上がった頃から香奈が迎えに来なくなった事が、実はちよっぴり寂しい達郎だが仲間の手前、間違ってもそんなそぶりを見せるわけにはいかないと決めている。

「何が、誰が」

……っ！ 文字通り跳ねあがる飛び起きると、幸恵が開け放ったままの入り口に香奈が立っていた。

「ちょ、何だよ」

「何って……ラジオ体操。ちゃんと起こしてくれって幸ねーさんに頼まれたけん」

「うるせーな、子供じゃないんだから行くかよ、んなの」

「はあ？ どーでも良いから早くしてよ。ほら」

達郎が布団を被って籠城戦を始めた。低学年の頃——いや幼稚園の頃から全く代わり映えのしない達郎に少し呆れたが、相手にするのが馬鹿らしい。勝手にタンスの引き出しからトレパンとＴシャツを引っ張り出して布団に突っ込む。

「なんでよー、いいじゃんラジオ体操なんか」

「るさいわね、幸ねえさんに昨日のこと言うで」

バシバシと布団の上から叩かれ、達郎は渋々と這い出す。寝間着を丸めて香奈が投げてきた服を吟味もしない、着替えるのに一分とかならなかった。

「ラジオ体操なんかマジメっばいけ、かつこ悪い」

アホか、と香奈は思ったが、そんな事でいちいち怒っていたらやつていられない。こっちでテキトーにコントロールしてやればいいだけの話だ。

「ほら、シャンとして歩く！」

「へいへい」

廊下側の出口から香奈が出て行く。達郎の部屋にはすぐ外に出られるサッシ戸もあって、2人とも普段はもっぱらそっちから出入りしている。とはいえ、さすがに朝くらいは挨拶しておくか、と達郎

も廊下を通って台所をのぞき込むと、母の折江が朝食の支度をしていた。

「おはよう、お父さんは？」

「あ、おはよう。もうとつくだに出たわよ。ごめんね香奈ちゃん」

「いえ、幸ねえさんの頼みですから」

「そう？ 悪いけどお願いね」

「いいけど、遅れるで」

こんな所で世間話を始められてはたまらない。母、折江の話は長いのだ。

「あ、じゃあ行ってきました」

「いつてらっしゃい、帰ってきたら朝ご飯。香奈ちゃんも食べていきい」

「ありがとうございます。でももうウチで食べて来ちゃったんで」

「あら、早いんですね。じゃあ行つてらっしゃい」

「はい」

「うーい」

家を出て、しばらくぼーっと歩く。走らないとギリギリなように思ったが、時間につるさい香奈が余裕なところを見ると、まだ間に合うのだろう。それに、達郎の家にはテレビの時報以外に正確な時計は一個もない。

「間に合うん」

「ん、大丈夫。走らなくてもいける」

香奈が腕時計を見て答えた。

「そっか」

考えてみると、朝こうして香奈と一緒に歩くのは久しぶりかもしれない。登校に限らず、高学年になってからはなんだか気恥ずかしくて、一緒に遊ぶことも少なくなっていた。黙っているのも達郎がちらと横を見たとき、それに気付いて声が漏れてしまった。

「あ」

「ん、何？」

きょんとした香奈が達郎の顔を見ると、彼の目線が自分の胸元にあつた。

「ああ、コレ？ 早速つけてみてん」

昨日もらった貝のペンダントだ。小振りなそれが夏の日差しにきらきらと光っている。

「……別に」

照れているのか、自分の作品の出来に不満なのか、複雑な表情を浮かべている。「似合ってるよ」なんて、達郎が言うはず無いのは分かっていたので、ぶっきらぼうな物言いも気にならない。

「あ、それより、昨日のルアーどうやった？」

それより、ねえ。

「ん、昨日は投げなかったよ。でもお風呂で浮かべてみたら良い感じだった」

「そつか……ん…… あれ、何や？」

「何？」

達郎が指さした先に、どこか見覚えのあるお地蔵様が立っていた。ただの……お地蔵様……？ それが、間違いなく、立っていた。

「ええ？」

二本の足で、まっすぐ、気を付けの姿勢で立っていた。邪魔にならないよう、道端に立っていた。

奇妙な立ち姿だった。足が、こんなに長かつたろうか？ 香奈のよく知っているその足は、ドラえもんのものよりちょっと長い——もしくは同程度のものだったはず。

「これ……カッパ寺の地蔵様だ」

好奇心丸出しで達郎が地蔵に近づこうとしている。頭の輪と少し突き出した口、磨り減って無くなりかけの顔。間違いなくあのお地蔵様だ。

「でも、なんでこんなところに……。誰かのイタズラ？」

「わからん、けど変やコレ」

もともと、そんなに大きな地蔵ではなかったはずなのだが、ちゃ

んと6頭身くらいになって、二足歩行も可能な勢いだ。身長も達郎より少し低いくらいで、低学年の子らと同じくらいだろう。

「なんか……気味悪いよ」

夏に怪談は付き物だが、明るいうちにただあるだけの地蔵が、こんなに怖いと思わなかった。思わず、地蔵に近づこうとしていた達郎のＴシャツの裾を握ってしまう。

「どうしよう……」

「どうしようだったって……あ」

困惑して茫然としている2人の耳に、ラジオ体操の軽快なメロディーが聞こえてきた。地蔵に気を取られているうちに6時が来てしまったらしい。

「いけねっ！ 走るぞ」

「うん」

香奈の手を握って、達郎が走り出す。怯えていたのか先を急いだのか、こちらを一度も振り返らなかった。自分から手を握ったことにも気付いていないらしい。

「大丈夫やなー」

ラジオは、ちょうど最初の歌が始まったばかり、第一に入る前の前置きの間にはなんとかかなりそうだ。

第3話「ミッシーの秘密」(後書き)

続きます。次は何とか一週間で書きたいなあ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9570h/>

夏の始まる秘密基地

2010年10月20日19時25分発行